

「ユダヤ人」フロイト —ピーター・ゲイ『神なきユダヤ人』を 手がかりに—

はじめに

- 1.フロイトの位置づけをめぐって
- 2.精神分析は「ユダヤ的」か
- 3.フロイトの科学観
- 4.フロイトと「ユダヤ的」なもの
おわりに

木村 祐治
関西大学

はじめに

【問題意識】

- 精神分析と「ユダヤ的なもの」とに関連はあるか。
- フロイトは自分の「ユダヤ人」としてのアイデンティティをどのようなものとして認識していたのか。



フロイトの「科学」観
フロイトの生育環境

-1-

1.フロイトの位置づけをめぐって

上山安敏『宗教と科学』

フロイト研究…フロイトをどのように位置づけるかが争点に
 ロマン主義者 ⇔ 啓蒙的合理主義者
 神秘主義者 ⇔ 西欧科学主義者
 シオニズムに好意を持つユダヤ民族主義者
 ⇔ 同化主義に近い隠れキリスト教徒

「現在でも、フロイト解釈は、ユダヤ神秘主義に実証を逸脱するほど傾斜した、バカンの『ユダヤ神秘主義とフロイト』の解釈と、西欧科学主義の知識圏でまとめたピーター・ゲイの『フロイト』との両極の間で揺れているのが現状である。」

「私は、フロイトを西欧科学主義、アングロサクソンのピューリタニズム、反カトリックとしてのプロテスタンティズムの脱魔術化に親近し、啓蒙的ヒューマニズムの側に身を置きながらも、ユダヤ的心性を持ち続けた人物と捉えている。」

-2-

ピーター・ゲイ『神なきユダヤ人』

「結論を言えば、フロイトはユダヤ人だったが、その学問はユダヤ的ではなかった。個人的アイデンティティと科学的忠誠心の間の決定的な区別は少しも損なわれていない。彼がユダヤ人であることは、精神分析にとって（フロイトにとってではなく、彼の創造物である精神分析にとって）本質的ではないのである」

フロイトと「科学」との関係

「もとより私は何も好んで同胞を傷つけようとは思っていません。しかし、そこで私は何をなしうるのでしょうか。私は、たとえ同胞にとって不快で不都合であったにしても、科学的真理と考えたものを擁護することに、長い生涯を費やしてきました。私はそれを中止するという行為で生涯を閉じることはできません」

（『モーセという男と一神教』についての発言）

1.フロイトの位置づけをめぐって

-3-

箱崎総一『カバラ』

「S.フロイトの精神分析理論の中核にはリビドー説があり、性の重要性が強調されている。カバラ思想とフロイト学説には、性の強調という部分での共通性がかなり多くみられる。」

「フロイトの『夢判断』を読んですぐに気づくことは、夢の象徴という考え方である。このような発想法はカバラ思想にも存在しており、（略）ゾハルの文章にも認められる。たとえばエデンの園は女性を表現しているという記述などは、まさにフロイトの夢分析の際の発想法と極めて近い位置にあると考えられる。具体的な記述がそのまま象徴のレベルに引き上げられているのである。」

2.精神分析は「ユダヤ的」か？

精神分析に「ユダヤ的科学」というラベルを貼ることは、ある種の好ましからざる仲間を受け入れることを意味している。それはかなり異質なグループを構成しており、そこにはフロイトは我が民族のものだということを主張したがるユダヤ人もいれば、同じく彼の価値を引きずり降ろしたがる悪意に満ちた異邦人も含まれるのだ。

(P.ゲイ『神なきユダヤ人』、p.116)

精神分析に対するネガティブな見解

- ▽方法が不正確
- ▽実験による検証が不可能
 - 非科学的
- ▽「ユダヤ的科学」

アンナ・フロイト

「ユダヤ的科学」のレッテルを肯定的に受け止める
「現在の状況においては、名誉の称号」



父ジークムントの見解（後述）よりも重視される

P.ゲイ

「現在の状況において」というアンナ・フロイトのフレーズに着目
→精神分析の創始時についてのものではない!!



「精神分析は、時の経過とともに、何らかの仕方でユダヤ的になったのだろうか？」

「精神分析=ユダヤ的」という見解

▽ナチスの台頭以前から存在

×ナチスへの反応

▽フロイト肯定側・否定側双方に存在

2.精神分析は「ユダヤ的」か？

-8-



ジョーンズ

ユダヤ人は特異な「心理学的直感の適性がある」

ローバック

ユダヤ人が精神分析を生み育てた理由

=ユダヤ人の特異な性格・気質

「ユダヤ人は心理学的な意味において分析的であり、
たえずあらゆることについてその《理由》と《由来》を自問している」

ザドガー

強迫神経症になりやすいユダヤ人の素質

→おそらく何千年も前から特徴的だった詮索癖と関連？

2.精神分析は「ユダヤ的」か？

-9-



フロイト自身は……

◎精神分析がユダヤ的科学となること、ユダヤ的科学と
みなされることを望まず

「アーリア的科学とユダヤ的科学の区別など存在しない」

▽科学に人種的バイアスはない

国民的、民族的、人種的性質とは無関係

▽精神分析もそのような「科学」のひとつ

◎一方で、アーリア人／ユダヤ人の差異は肯定

「ユダヤ人であること」にも強い思い入れ

2.精神分析は「ユダヤ的」か？

-10-



3.フロイトの科学観

飯岡秀夫「フロイトの「世界観」」

◎フロイトと「科学」

自身の世界観を「科学的世界観」=「科学（的真理）」の上に
構築されるものとして位置づけ

「科学的真理」とは……

▽科学的研究の到達目標

▽現実との一致によって特別扱いされている知識

▽「外界」と「内界」に現存する経験的「事実」
（=「自然現象」「社会現象」「心理現象」）と
それらについての「（知覚・）認識」とが一致す
ること

「科学」が「真理」に到達するためには……

▽「魔術的なもの」の排除

「啓示」「直覚」「予覚」etc ⇔ 「真理」

-11-



「科学研究」のプロセス

知覚の確実性を基礎とした推論



日常の手段では得られないような新しい知覚
(科学的仮説) の構築

- 1) 経験的「事実」の「観察」
「観察」による新事実の発見
「事実」に関する確実な「知」の確認
- 2) 「因果連関」「法則」の発見
当初は互いに無関係な個々の「事実」

↓
推測

↓
補助構成
実験等によって確認されなければ
撤回

……の積み重ね
⇒「真理」への接近

フロイトの科学観はどこから？

フロイトを育成した「時代精神」 = 「啓蒙思想」
ウィーンにおける産業資本主義の興隆
→近代国家の形成に対応
合理主義的

フョイエルバッハの唯物論哲学
ブリュッケ（医学部時代の指導教員）
唯物論的生命観
ダーウィンの進化論
実証主義的精神態度



ウィーン実証主義者の「科学的世界観」を継承

◎自称「みすばらしいユダヤ人」「老いたセム人」

◎ユダヤ教については……

「私はユダヤの宗教から—他のすべての宗教からと同じくらい—離れていると言えます。私にとって、それらは科学的関心の主題としてはきわめて重要ですが、感情的な関与はありません。一方では、私は昔から自分の人種との強い連帯感を覚えていましたし、私の子供たちにおいてもこの連帯感を培ってきました。私たちはすべてユダヤ人としての自覚をもち続けています」（1925年の書簡）

◎フロイトとユダヤ主義とのアイデンティフィケーション

▽完全に世俗的で、宗教性はゼロ

「私は他のどの宗教にも所属していないのと同様、ユダヤ教にも属してはおりません」（1929年の書簡）

「私は自分の祖先の宗教から完全に疎外されている—他のすべての宗教からも疎外されているように」（『トーテムとタブー』ヘブライ語版序文）

「神は私にはそのような内的な声を聞かせてくれませんでした。ですから、自分はこれまでと同じままで、つまり「信仰なきユダヤ人（an infidel Jew）」のままでいることになりそうです」（あるアメリカ人医師が自分の体験した宗教的ヴィジョンをフロイトに語り、こうした経験を考察すればあなたも神を見出すことになるでしょう、と勧めたことに対して）

◎フロイトの生育環境とユダヤ教

▽父・ヤーコブ

過越祭を祝ったり、ヘブライ語で聖書を読んだりするだけ

▽ジークムント

本格的な宗教教育は受けず、ヘブライ語も未修得

◎フロイトの受けた宗教教育、歴史教育

ユダヤ教改革派の影響

「ユダヤ教科学」が発信地

「歴史こそ真理」

「宗教は歴史にもとづくべき」

ユダヤ人社会における保守的正統派と改革派との相克を身近に経験

▽小学生時代…ユダヤ教

ハンマーシュラク

立憲時代の啓蒙を感受したユダヤ教改革派の
推進者

▽ギムナジウム時代…歴史

ブロイヤー

改革派に共感

「彼らの教育なしに、フロイトがユダヤ教とヒューマニティとを
つなぐ思想を具体的に表現できたとは考えられない。」

「『モーセと一神教』に表白されるユダヤ教とヒューマニティの
一致への革新は、ウィーンの改革派の精神的雰囲気の中で醸成さ
れたものであった。」（上山『宗教と科学』、p.80）

成人してからは……

▽婚約者マルタに正統派の信仰と慣習を捨てるよう要求
マルタの祖父は保守的正統派

▽結婚後も宗教行事とは一切無縁

息子マルチンの回想

「私たちの祭日は、蝋燭に照らされたツリーの下に
プレゼントがあるクリスマス、そしてきれいな彩
色をほどこした卵のある復活祭だった。私は一度
もシナゴークに行ったことはなかった。私の知る
かぎりでは兄弟や姉妹も同じだった」

P.ゲイ

フロイトのユダヤ人としてのアイデンティティは疑いな
いとしても……

「フロイトのユダヤ人アイデンティティは精神分析の形
成にどのような役割を果たしたのか？」

P.ゲイによる「ユダヤ的性質」の分類

1)職業的意味

精神分析家としての活動とユダヤ性との関連

2)知性的意味

知的バックグラウンドとユダヤ性との関連

3)人種的意味

4)社会学的意味

1)職業的意味

◎フロイトの見た症例に「ユダヤ性」はあるか？

▽患者…ユダヤ的法則には従っておらず
無意識、リビード、抑圧、昇華etc
→すべて普遍的

▽言い間違い、ジョーク『日常生活の精神病理学』
ジョークのユダヤ性は表層部分だけ
→「その核心は普遍的」
ジョークを口にするユダヤ人を人間的にする
ものこそが問題

2)知性的意味

◎フロイトにユダヤの知的祖先を見出せるか？
ドイツ文化、イギリス文化に多くを負う
ゲーテ、ダーウィンetc

◎精神分析にユダヤ神秘思想の影響はあるか？
ローバック
「フロイトの方法は、カバラ哲学の根底にある
シンボリズムを強く連想させる」
バカン
「フロイトの中にはカバラの精神が生きている」

【ユダヤ神秘主義の用語】

エドワード・ホフマン『カバラー心理学—ユダヤ教神秘主義入門』

カバラ、カバラー (Kabbalah)

「受け取る」という意味のヘブライ語に由来する語。ユダヤ教神秘主義それ自体を示す総称として用いられることが多いが、ヨリ厳密には、12世紀後半以降のユダヤの秘教思想を指す。

ハシディズム (Hasidism)

18世紀後半に東欧のユダヤ人のあいだで興った、カリスマ的指導者を始祖とする民衆運動。ハシード (hasid) は、「敬虔な」という意味のヘブライ語。それが名詞として使われたときの複数形がハシディーム (Hasidim) で、ハシディズムを信奉する人々の集団の意。

ゾハル、ゾーハル (Zohar)

『光輝の書』。13世紀後半のスペインに初めて現れた、カバラーの「バイブル」ともいえるべき、影響力の最も強いカバラーの書。その大部分が1280年代または1290年代に成立したと言われている。

ホフマン

カバラと精神分析との関連を強調

ユダヤ神秘主義

心の病気／体の病気を完全に分けて考えない

→特に、18世紀の初期ハシディズムの指導者が強調

身体的苦痛…情動と関連

抑鬱状態…身体的方法で快方に向かう可能性

精神分析へのフロイトの最大の貢献の一つ

20世紀初頭に、科学者が情動の影響を受けて身体に
症状が現れることを認めるようになったこと

カバラと夢解釈

カバリスト…睡眠や夢の役割を重視

睡眠

▽体力補給

▽高次の霊力に対して心を開く

夢

▽自己探求の鍵を握る重要な道、宇宙に関する
ヨリ深遠な智慧に至る道を与える

▽日常の心の状態を映し出し、普段の情動を暴露

「自分の夢のメッセージに細心の注意を払うべし」



確固たる技法の必要性

▽一定のルールに従って夢を解釈

▽すべての人間の夢は、身分に関係なく、常に同じ
一定の方法で解読可能

睡眠中、心は「象徴」によって働く

夢の多くの特徴は、抽象的な思考や隠された感情
を表わす

しかし、フロイト自身は神秘主義を拒否

▽「精神分析にとってのユダヤ人の特殊な才能は、神
秘的要素を欠いていること」

▽モーセと出エジプトが残した経験こそ決定的
モーセの一神教の特徴

魔術や秘教の拒否

精神における進歩を刺激し、昇華を促す
真理を所有する意識と選民意識

知的なものの尊重と倫理的なものの強調

3)人種的意味

4)社会学的意味

→フロイトはどちらも進んで採用

「ユダヤ人の伝統とユダヤ人の牽引力を不可抗的たらし
めるものは他にいくつもありました。はっきりと言葉に
捉えられることが少ないだけにいっそう強い数多くのぼ
んやりした感情的な力、また内的アイデンティティの明
瞭な意識、同じ心的構成の秘密、等です」（フロイトの
発言）

3)人種的意味

◎フロイトの規定されざるユダヤ性の感覚

獲得形質の遺伝についての彼の執拗な信念の特殊事例のひとつ？

▽「フロイトは自分のユダヤ性を、なんらかのかたちで系統発生的な素質の一部をなすものとみていた」

▽『トーテムとタブー』『モーセという男と一神教』etc

「「有史以前に対する偏愛」が形成された理由の一つは、それらが一度も訪れたことがないけれど、彼が秘かに自分の本当の故郷だと考えていた世界を思い起こさせる力を持っていたからだということは間違いない」

P.ゲイ

◎フロイトのユダヤ的アイデンティティの感情

▽原理的には研究可能

▽（現時点では）謎めいていて科学の彼方にある心理的現象

「フロイトは自らのユダヤ人アイデンティティの本質を分析できないでいた」

4)社会学的意味

フロイト

ユダヤ教とは無縁

反ユダヤ主義的な環境

▽疎外感・「周辺人」

▽一方で、「反対派」であることへの慣れ、「ある種の判断の独立性」も培われる

「私はユダヤ人であったがゆえに、他の人々の場合その知性使用に制限を加えた数多くの偏見から自由でいられたのだし、ユダヤ人として私は反対者の位置に立ち、《固く結んだ多数者》との協調を断念する用意ができていました」

環境への反抗→自らのユダヤ性の肯定

「私の母語はドイツ語です。私の文化も業績もドイツ的なものです。私は自分を知的な意味でドイツに属すると考えていました。しかしそれは私がドイツおよびドイツ語圏のオーストリアにおける反ユダヤ主義に気づくまででした。その時以来、私は自分をユダヤ人と呼ぶ方を好むようになりました」

P.ゲイ

周辺人であったことが、フロイトに精神分析をもたらしたのか？

→×

▽ユダヤ人の多様性

周辺性…反抗だけでなく、同調ももたらす
キリスト教への改宗、共産党への参加、
アメリカへの亡命、シオニズムへの参加etc

▽全体としてみれば、ユダヤ人のみがとりたてて知的、
独創的であったというわけでもない

おわりに

フロイトと「ユダヤ的なもの」との関係

→P.ゲイ、上山の見解が妥当

精神分析との関係

▽ユダヤ神秘主義の影響の可能性を完全に否定することは困難
(そもそも、フロイトの理論それ自体が、患者の現在の姿だけではなく、生育史を重視)。

▽ただし、目指したものはあくまでも「科学的なもの」であり、
精神分析=「ユダヤ的」と位置づけること、精神分析をユダヤ神秘主義の延長線上に見出すことは少々強引ではないか。

※ユダヤ教から距離を置いたことも、科学志向の表れか？

「ユダヤ人」としてのアイデンティティ

▽「反ユダヤ主義」への反発、対抗意識

『モーセという男と一神教』のテーマ

- 1.ユダヤ人をユダヤ人たらしめているもの
(ユダヤ性)とは何か
- 2.反ユダヤ主義の原因は何か

▽民族性、宗教性の濃いものではない

【参考文献】

ピーター・ゲイ『神なきユダヤ人 フロイト・無神論・精神分析の誕生』入江良平・訳(みすず書房、1992年)

上山安敏『宗教と科学—ユダヤ教とキリスト教の間』(岩波書店、2005年)

箱崎総一『カバラ ユダヤ神秘思想の系譜』(青土社、1986年)

飯岡秀夫「フロイトの「世界観」—「運命」と「断念」—(上)」『高崎経済大学論集』(第49巻第3-4合併号、2007年)

エドワード・ホフマン『カバラー心理学—ユダヤ教神秘主義入門』村本詔司、今西康子・訳(人文書院、2006年)

サトウタツヤ、渡邊芳之『心理学・入門—心理学はこんなに面白い』(有斐閣、2011年)

小山尚之「超越と精神的な外傷—フロイトの『人間モーセと一神教』をめぐる覚書—」『東京海洋大学紀要』(第3巻、2007年)